

夢と力をはぐくむ小学校教育

山下 泰裕（東海大学教授）

池田 芳和（全国連合小学校長会長）

司会・青木哲男（全国連合小学校長会広報部長）

口サンゼルスオリンピックの金メダリストであり、国民栄誉賞を授与された国際的な柔道家、東海大学教授・山下泰裕氏と全国連小池田芳和会長に「夢と力をはぐくむ小学校教育」について語り合っていただいた。その中で、小学校教育への期待や願いを伺うことにより、新しい時代における学校の在り方を考える契機としたいたと考え、この対談を企画した。

この対談が、ドラステイックに展開する教育改革の真っ只中で奮闘する全国二万二千余の小学校長にエールを送ることになり、併せて明日の学校経営への役立つ知恵と勇気になることを願っている。



左から青木広報部長、山下東海大学教授、池田会長（於：全連小事務局）

青木（司会） 本日は、新春にあたり、東海大学教授でいらっしゃる柔道の山下泰裕先生と私ども池田芳和会長の対談を通して、お二人の人となりを紹介させていただきます。それとともに、二十一世紀の国際社会の中で、現在の学校教育にかかる様々な改革の動き、そして「フリータイ」や「ニート」といわれる若者の出現、IT革命ともいわれる変化の激しい社会状況の中にあって、日本人として主体的に生きていくために、今の子供たちに「どのような資質や能力を身に付けさせていかなければならないのか」、そのためには「どのような夢をもたせていったらよいのか」、また「小学校教育はいかにあるべきか」などについてお話し合いたいと思います。

特に山下先生は、柔道の世界において頂点を極め、現在、後進の指導にも当たつておられます。そうしたご経験から、スポーツの世界を広い意味で「人生」と見立てて、「確かな目標をもち、夢を実現すること」、ひいては「これから的小学校教育のあるべき姿」「学校への期待」などについてご示唆をいただき、小学校教育にかかる私ども校長の指針となり、二万二千余人の会員に夢と希望を与え、明日からの学校教育を推進していく勇気付けるとなるお言葉をいただければ幸いでございます。よろしくお願ひいたします。

小学校時代の思い出

青木 はじめに、小学校時代の思い出として、今も心に残っている事柄やエピソードなどをお聞かせいただきたいと思います。まず、池田会長からお願ひいたします。

池田（会長） 山下先生、今日はお忙しい中をおいでいただきまして、ありがとうございます。

私は団塊の世代、昭和二十三年生まれですから、山下先生とは十歳ぐらい違うのでしょうかね。

山下（教授） 私は昭和三十二年生まれです。

池田 小学校入学は昭和三十年で、そのころ、学校は自由に遊ばさせてくれたですね。戦後生まれの私どもは、野球、ソフトボールが中心でした。

山下 私もよくやりましたね、ソフトボールは。

池田 朝早く学校に行つて、マット運動だの跳び箱とか、けっこうやりましたね。

地域では少年野球ですね。長嶋が全盛のころですから。

山下 私も、「巨人・大鵬・卵焼き」の時代ですよ、小学校のころは。

池田 今の子供たちは群れるということはないんですけど、そのころは、子供が群れていたというか、いっぱいいたから、みんなで遊んでいた。近所で、缶けりとか、かくれん



池田芳和 全連小会長

いけだ・よしかず 昭和二十三年福井県生まれ。昭和四十七年東京学芸大学卒業。兵庫教育大学大学院修了。北区立赤羽台西小、文京区立湯島小教諭。目黒区・都立教育研究所・都教育厅指導企画課、指導主任。目黒区教育委員会指導室長。都教育厅指導部主任指導主事。都教育厅初等教育指導課長。港区立青南小学校長。現在、港区立御成門小学校長、全国連合小学校長会長、都公立小学校長会長。

ほか、そんなのを当たり前にやつていました。

山下 やつてました、私も。

池田 そういう面では、子供同士のかかわりがすごく多くて、それは楽しかった。遅く帰って、裸足で歩くものですから、板の間に足跡がペタペタと白くついて、母親にどうらく怒られたりしましたし。

そんな時代で、子供たち自身がある意味では自由であり、人とのつながりがあった。そういう中で、憧れる人がたくさんいたというのが、僕たちの時代のいいところだったのかなと思いますね。

青木 山下先生、柔道の出会いも含めまして、いろいろ少年時代の思い出を聞かせていただければ。

山下 九州の地図を見て、真ん中あたりをポンと指すと九州山地、そこが私の生まれたところです。山間部の、高原野菜とか林業を中心の町です。

小学校では、大変な暴れん坊でした。一年生のころは、毎日グラウンドを走らされた記憶がありますね。職員会議をやっているとき、教室で騒いでいる声が聞こえるらしいのです。担任の先生が教室に入ってきて、「また騒いでたでよう。走つてきなさい」と言わされて、校庭を三周、四周走つてから授業に参加するということがありましたね。



山下泰裕 東海大学教授

やました・やすひろ 昭和三十二年熊本県生まれ。昭和五十五年東海大学体育学部卒業。東海大学大学院修了。昭和五十二～六十年全日本柔道選手権九年連続優勝。昭和五十九年ロサンゼルスオリンピック無差別級優勝。翌年二百三連勝にて現役引退。現在、東海大学体育学部教授、特定非営利活動法人柔道教育ソリダリティー理事長、東京オリンピック招致大使などを兼務。

これは卒業してから聞いた話ですが、一年から二年に上がるときに、私があんまり悪いから、クラス替えはないけど、山下だけ学年主任のしつけの厳しい先生のクラスに編入させようかという話が職員会議で上がつて、いくら何でもそれはかわいそうだろう、傷つくだろうと。そういうところに、よそから転任してこられた先生が、「そんな悪かつたら面白い、私がもってみたい」と言われて、「おまえはそのまま二組に上がれたんだよ」と聞かされました。

小学校へ行つたときに、もうクラスメイトより頭一つ大きくて、元気がよかつたんです。短距離は、だれにも負けなかつたですね。学年で二番目に速かつたと思います。ソフトボールも好きでしたし。ただ、エネルギーがあり余つて、あり余つたエネルギーが悪いほうへ悪いほうへ行つて、結果として、友達をいじめたり、物を壊したりという形になつていたと思います。

小学校時代、おふくろに関して二つ思い出があるんです。一つは、小学校二年生のとき、同じ幼稚園から来た仲間がいじめられたんですね。僕はそれを聞き付けて走つていって、いじめている子供に「何するんだ!」と言つたら、その子がワーッと泣き出して、私がいじめたと。家にもそういう苦情がきて、おふくろに「いっぱい学校に迷惑かけ

てきているけど、おれはいじめてない」と言つたら、おふくろが私の言葉を信じたんですよ。学校に言いに行つたのです、「うちの息子はいっぱい迷惑をかけているけど、このことはよく調べてほしい」と。昔の喧嘩つて、泣いたら終わりなんですよ。泣いているのに手を出すということは、考えられないわけです。それは非常に卑怯です。それで担任の先生が謝りに来られた。そのときに、幼な心に、このおふくろを裏切つちやいかんなという気持ちが芽生えましたね。

もう一つは、一年生か二年生のときか忘れましたが、学校の帰りに、何人かでジャンケンして、負けた者がかばんを全部持つて帰るというのをやつていたんです。その中に軽い小児麻痺の子がいたんです。おふくろがたまたま通りかかった。私は自分のかばんを持っていない。その小児麻痺の子が、三つとか四つ、かばんを持っている。おふくろが怒りまして、「何だ、おまえは」。私も激しく「おれは何も悪いことしてない。おれはジャンケンで勝つたんだ」と。そしたら「ちょっと、こっちおいで。あなたね、こんな人一倍体が大きくて、○○君は障害があるんじゃないの。彼が負けたときに、あなたはなぜ『おれが代わりに持つてやる』と言えないの! 情けない!」と言われて、シユンと

して。

その二回ですね。信じてもらつたことと怒られたことと
いうのは、両方、なぜか非常に心に残つているんですよ。

柔道との出会い

山下 柔道を始めたのは、十歳、小学校四年生です。あ
んまり悪さばかりするもので、両親も、体はでかいし、
元気はあり余っているし、このまま行つたら将来とんでも
ないことになるんじやないかと。家は食料品店をやつてい
るから、親父もおふくろも夜遅くまで働かなきやいかんの
ですよ。なかなか子供の世話まで手が回らない。近所の方
から、近くに柔道場がある、その先生は非常に厳しいとい
う話を聞いて、「ビシビシ鍛えてください」と言つて私を
連れて行つたのが始まりです。

そんなことで始めた柔道ですが、遊びの延長としてやつ
ていましたので、柔道をやつたからといって私の行いが小
学校時代にいいほうに変わることはなかつたですね。
ただ、柔道着を着て決まりを守つて正々堂々とやれば、道
場でいくら暴れ回つてもいいわけですよ。だから、激しい
スポーツである柔道は大好きになりましたね。

池田

私は柔道の試合を見るのが好きで、よくテレビを

三泊ほど帰宅したんですが、一晩、小学校時代の同級生が
たくさん集まつてくれた。町から熊本市内に行つた者もい
れば、県外に行つた者、九州から離れた者もいる。しかし、
「やつちゃんが帰つてくる」というので集まつて、同級生
だけのお祝いの会を開いてくれました。

池田 いいですね。

山下 そこで、最後に記念品をもらつたんです。一枚の
表彰状です。こう書かれていました。「表彰状 山下泰裕
殿 あなたは小学生時代、その比類稀なる体をもて余し、
教室で暴れたり仲間をいじめたりして我々同級生に多大な
迷惑をかけました。今回のオリンピックにおいては不慮の
怪我にもかかわらず我々同級生の期待を裏切るまいと持ち
前の闘魂を發揮して見事金メダルに輝かされました。このこ
とはあなたの小学生時代の数々の悪行を清算して余りある
だけでなく、我々同級生の心から誇りとするものであります。
よつてここに表彰をし、偉大なるやつちゃんに対し最大の敬意をはらうとともに永遠の友情を約束するものであ
ります」。これは私の宝物です。

おじいちゃん

観せてもらいましたが、山下さんの試合のときに、必ずおじいちゃんという人がテレビで映っていますよね。おじいちゃんが柔道を支援したということはあるのですか。

山下 中学以降ですね。

道場の先生が、警察の先生だつたんです。小さな町で、うちのじいさんとは犬猿の仲でした。(笑い)

じいさんは、私が生まれる前は、料亭をやつていたらしいんです。私は初孫で、私が生まれるときに、バッサリその仕事をやめて、食料品店に変えたんです。私が柔道を始めるころには、熊本市内に移つていて、鮮魚の仲買いをしていました。最初は、じいさんにこつそり、内緒で始めました。一年もしないうちに、「泰裕、おい、柔道やりたかったら、やつてもいいぞ。じいさんとあの先生のことは気にしなくともいいからな」と言されました。

中学校からは、親元を離れて、熊本市内の中学校に行くんです。ここでじいさんと二人三脚。ここからです。

うちの親父は養子で、じいさんはおふくろの親父です。私が初孫ということで、おふくろは、アヒルの卵が非常に体にいいと、アヒルの生卵をいっぱい飲まされたり、いろいろのじいさんにやらされたみたいです。

じいさんは、鮮魚の仲買いで、家にも風呂があるんです

が、目の前が風呂屋だつたのですから、夕方、銭湯の一番風呂に行つて、赤子の私を風呂に入れて、私を横に抱きながら、ビールを飲みながら肴をつまむというのが日課で、私が六か月になつてから、この自身の魚が乳飲み子に悪かろうはずがないと、最初は噛み碎いて食べさせたらうまそうに食べた。それからは、刺身に必ずみじん切りがついた。

刺身を取ると、骨が出るでしょう。そのアラを二、三時間煮込んで、それを飲ませてくれた。これが非常によかつたみたいですね。骨も丈夫なんですよ。生まれたときは三千グラムだつたけど、一歳半ぐらいのときには熊本県の赤ちゃんコンクールで最優秀児賞をもらつてているんですね。その後はどんどん成長していきます。

それで言うと、じいさんの影響は大きかつたです。中学校以降は、いつもじいさんが食事をつくつたり、いろいろ。

池田 親代わりですね。

山下 はい。家が離れていますからね。で、試合になると、いつも杖をつきながら和服で行くわけです。外国でもどこでも。

池田 テレビを観ていて、山下先生が出てくると、必ず

映つていたからですね。

山下 両親も来てるんですよ。親父は、私や私の兄弟の

試合の前には、好きなタバコを断つわけです。優勝が決まつた瞬間に、だれもいないところに行つて、ニコツとしながら一人でタバコに火を付けて、フーッと、何とも言えないうれしそうな顔をする、そんな親父なんです。じいさんは、優勝したら、畳を降りてくる前に杖をついて「ようやつた」と言いたい。だから、私には父親はいないんじやないかとか、「山下君のお父さんはかなりご高齢であるな」とか。というのは、じいさんばかり映つて、両親がほとんど映らなかつたでしょ。

池田 そうです。必ずコメントもそうだった、おじいさんが来ていると。

山下 マスコミから言つても、おじいちゃんが孫の試合のために若干足が悪いのに杖をつきながら応援にくるというのが一番絵になるんですよ。一九八四年十月に私が国民栄誉賞をもらうんですが、もらつた三十分後に亡くなつた。

家族

翌日の新聞一面は、「山下が国民栄誉賞をもらつた」じゃないんです。「山下のおじいちゃんが亡くなつた」がずっとニュースとしては大きいわけです。だから葬式のときも、「いやあ、じいさんは自分の最後の出番のところまでちゃんと演出してあの世に行つたな」なんて。もちろん三日ぐらい前から意識がなくて、お医者さんが、私がもらうこと

が分かつていましたから、何とか受賞が終わるまではもたせたいという思いもあつたんですけどね。

池田 おじいちゃんのそれだけの思いがあつて、期待が膨らんでいるわけでしょう。お母さん、お父さんと同じぐらいの愛情を注いでいた。そういう孫とおじいちゃんの関係の中で、期待に応えなきやとか、そういうものはあつたんだろうと思いますが、どうですか。

山下 チームのために勝ちたい、みんなのために勝ちたいという思いはありますが、オリンピックも含めて、だれかの期待に応えるというのは、そんなに……。全くないわけじゃないけど、私の場合は、自分自身が勝ちたい、一緒に頑張ってきた仲間で勝ちたいという気持ちのほうがはるかに強いから、マイナスの要因で働くということはあまりなかつたですね。

山下 私の家は食料品店と中卸で、熊本市内から仕入れてきたものを、もう一つ山の奥のほうの小さな小売店に卸

していく。けつこう大変な仕事で、親父やおふくろの働く後ろ姿をいつも見ていました。親の働く姿、汗水流している姿を見ているというのは、ものすごく大きいですね。反発もするけど、それ以上に親に対する感謝の気持ちは自然に出てきますよ。

今、我々は両親に負けないくらい仕事をしているんだけど、その姿はほとんど見えませんよね。私は、親の働く姿

を目の前で見ていた。うちの兄弟にとつては、親父とかおふくろを手伝うことは、ある意味で当然のことだった。そういう経験ができたというのは、非常にありがたいかな。

池田 今の子供たちは、確かに、親が働いている姿は見えないわけですね。サラリーマンが多いですから。家庭に疲れて帰つてきている親しか見ていない部分があつて、それは少しかわいそうだなと思いますね。一生懸命働いている姿を見ていれば、自然に、親のために何かしなきやとか、手伝わなきやとか、それは当たり前だという感覚が出てくるけれども、そういうのは、今家庭でもなかなかないから。

山下 自分の子供から「お父さんみたいになりたい」

「お父さんのような仕事をしたい」と思われたら、これは父親にとつてはこの上ない喜びなんじやないか。もし娘が

「お母さんみたいになりたい」と思つたとしたら。だから、大学で教えていて、お父さんあるいはお母さんが教員で、私も教員になりたいとか、外に出て勉強しながらでも将来は親父の家業を継ぎたいとか、そういうのは「いいなあ」と思います。仕事を継ぐ、継がないじゃなく、そこには親に対する尊敬とか信頼がある。それが非常に希薄になつてきている。

我々は、中学校、高校、大学時代というのは、親が、自分が食うものを十分食わんでも、十分着るもの着なくても、でも子供だけには十分な教育をしてあげたい、できれば子供にはきちんと恥ずかしくない格好をさせてあげたい、そういう親が多かつたと思います。我々とは比較にならないぐらい親はそう思つて努力して我々を大きくしてくれたのに、もしかしたら、我々にそういうことに対しても感謝の気持ちがない。自分の親だけじゃなくて、経済成長、戦後の敗戦からここまで頑張られた方々に対して、思ひが至らない。そういうことが次の時代の子供たちに出てきている部分もあるのかもしれないですね。

子供たちに託す夢

青木 山下先生は、今まで柔道で学んできたことを生か

し、教育改革国民会議や中央教育審議会などで委員をされて、いろいろな場で発言をされていると思います。そこで、二十一世紀に生きる子供たちにどのような期待をおもちでしょうか。

山下 物は、今の子供たちより私の時代、私のころよりは会長のほうがもつと不自由で、だけど、周囲もみんな物がなかつた。みんなおなかいっぱい食べられなかつた。靴がない人もいた。でも、子供に元気がありましたね。子供に笑顔がありましたね。瞳が輝いていましたよね。私は一番願うことは、子供たちが生き生きと、瞳輝き、笑顔が美しく、それぞれの輝きをもつた子供たちが将来に夢をもつ、そういうふうになつてほしい。現実はそうじやない。そういう方向に向けて、わずかずつでも、我々大人一人一人が、次の時代が明るくなるように努力をしていく。そういうことが大事だと思います。子供の姿というのは親の姿を映しているものであつて、子供たちの姿は、我々が住んでいる社会、あるいは大人の有様を映しているものだと私は思つています。

前から嫌いだつたのは、「今の子供たちは」といつた言葉。きのう生まれた子供も、十年前に生まれた子供も、二十年前も、五十年前も、百年前も、オギヤーと生まれた子

供たちは基本的に同じじやないか。その子供たちがどういうふうに育つていくか。これは、家庭環境、教育の環境もある。しかし、そこに大きな影響を与えてるのは世の中の価値観じやないか。子供たちが悪いんじやなくて、我々が悪い。我々の考え方、価値観が間違つてゐるんじやないか。私はそう感じました。

もつと嫌だつたのは、第三者のように構えること。「いやあ、世の中が悪いんだよ。世の中が間違つてゐる」、そういう言い方をするときには、自分は「悪い」に入つてない。我々一人一人が社会をつくつてゐるのであつて、自分を別格に置くのは、それは違うでしよう。

池田 当事者意識がない。

山下 実は私、中学時代に「将来の夢」という題の作文で、こんなことを書いてゐるんです。「柔道が大好きだ。一生懸命、柔道の稽古に励んでいる。柔道が強い高校、大学に行きたい。そして将来はオリンピックに出場したい。オリンピックに出場して、メインホールに日の丸を仰ぎ見ながら君が代を聴けたら、最高だろうな」と。小学校一年生のときに東京オリンピックがあつた。この印象が強烈だったわけです。そして最後に、「柔道の現役を辞めた後は、柔道の素晴らしさを世界の人々に広げられるような仕事を

したい」と。おかげさまで、オリンピックにも出た。優勝もした。しかも、今私の仕事の一つが、世界の国々にもつともっと柔道を普及させることです。

夢をもつということは、どれだけ大切なことか。今、小学校の子供たちだけじゃない、中学生、高校生、大学生、若者も含めて、どれくらい夢をもつてているか。もつてている人もいるけど、全体としては少ないですね。

我々はサラリーマンで、家に疲れ果てて帰って、子供に疲れた姿を見せ、子供の前で愚痴を言う。愚痴は言つてもいいです。だけど、我々が夢やこれからを語らないで、人生がいかに素晴らしいものかということを語らないで、子供たちがこれから的人生に夢はもてないですね。

我々は、多少無理しても、子供たちの前ではもう少し元気を出さなきやいけない。もっと自信と勇気をもたなきやいかん。周りとはあまり競わないで。いろんな輝き方があるんですから。何も政治家だけが偉いわけじゃない。医者だけが偉いんじゃない。弁護士が、高級官僚が、先生が偉いんじゃない。

私はよく学生に言うんです。3Kという仕事があるでしょう。きつい・汚い・危険。おれは、そういう仕事をバカにする人間は大嫌いだ。そういうことをやってくださる人

がいるから、我々が快適に暮らしていける。そういう人たちに対して、我々は感謝の気持ちをもつて接していくかなきやいけない。教室、トイレをきれいにしてくださつてありがとうございます。いつもごみをきちんととしてありがとうございます。それが人間の本来の姿だと思うんですよ。だけど、もしかすると、人々はそういう人たちをバカにするかもしれない。人にはいろいろ輝き方がある。他人と比較するんじゃない。いろいろな職業があつて、いろいろな生き方があつて、そして社会がある。いろいろな大切なところを認めていく必要があるんじゃないか。そういう話をすらんですね。

どんな仕事の人たちも、すべてそれは社会にとつて必要な仕事。少し人より地位が上だからとふんぞり返つたりするのではなく勘違いだし、みんなその仕事に誇りをもつてやつていただきて、自信をもつて夢を語つていただく。そして子供たちが、笑顔で瞳輝いて生き生きと生きる。笑い声が絶えない。そうすると優しさが溢れてくる。

多分、難しいと思います。日本だけじゃなくて、世界でそういう形になつていくのは、非常に難しくなつてている。世界が、あまりにも目に見えるものだけを大事にし過ぎているような気がする。市場原理というか。そう感じますね。

青木 これから子供たちにとつて何が大切かという話ですが、会長、いかがですか。

池田 山下先生がおつしやったように、やっぱり、一人人が輝いてなきやダメですよね。私たちは小学校の経営に当たっているわけですけれども、子供たち一人一人をしつかりと受け止めることが大事だと思います。

私も先生になりたいと思ったのは、小学校のときです。そういう中で先生になつて、初めて学校に行つたときに、今日から先生だというので、紹介されますが、そのときに、私は今でも覚えているのは、三十九人のクラスだったので「三十九面鏡になろう」という話をしたんです。

山下 素晴らしい話ですね。

池田 先生が、一人一人をきちんと映してあげないと育たないじゃないですか。先生が鏡の役割もしなきやいけない。映してあげて、しつかりその子に返してあげる。それは先生の役割かな。先生がそれをしつかりやれていれば、子供自身は、しつかりと受け止めてもらつてある信頼感というものがあつて、それで自分で何とかしていかなきやいけないということを考えたり、目標をもつたり、夢をもつたりできるじゃないですか。自分を信じてもらえてないと思うと、「どうでもいいや」となつたりするわけでしょう。

これから子供たちにとつても、そのあたりの考え方といふのは、基本的には、どんなに時代が変わろうとも変わらないと思いますね。そういう意味で、子供たちに、夢とか、目的とか、希望とか、そういうものをしつかりともたせられるような教育にしなければいけないと思いますね。

そのときに、私たちは小学校ですから、何に一番ウエートをかけてやるかというと、教育の中身ですね。中身をどうするか。子供にとつて、学んで意味があるもの、今日学校に行つてよかつたな、そういうことだつてものすごく必要なわけです。ですから、教育には「不易と流行」ということをよく言いますが、不易の部分というのはどこの世界に行つても大事なものですから、そこのところを基本的に貫いていかなければいけないだろうと思つています。

そういう意味で、これから子供たちにしても、心を大事にする、体を鍛えるということ、こういったことは子供のころからやらなければできないことなので、その時代その時代にしつかりと身に付けさせていく努力を、学校もしなければいけないし、家庭もしなければいけない。先ほど言われた「大人が自信をもつて手本を見せる」ということをしていかなければいけないんじやないですかね。

山下 今、一人一人をしつかり受け止めてあげることが

教師として大事だと言わされました。非常に胸に響いたのですが、なかなか難しいですね。でも、これができたときに、たぶん、子供たちはすごく安心するし、すごく信頼しますよね。今、家庭も含めて、子供たちをしっかりと受け止めてあげられるところが非常になくなってきて、不安をもつてている子供たちが多いと思います。そういう意味で言うと、難しいけれども、そういうことが大事だということ。これは小学校だけじゃないと思います。高等教育でもそう。もしかしたら社会人になっても、今そういう自立ができるかもしれませんから、そういう部分は大事かなという気がします。

私も教員になって二十六年。たくさん失敗はありました。思い込みが強くて、情熱はあるけど、自分の経験だけを一



方的に押しつけた。最初のころの学生には非常に迷惑をかけた。失敗を繰り返しながら、しかし、少しずつ少しずつ、そういうものを通して教育というものが分かってきたような気がするし、振り返ってみると、言つたことがパツとすぐ通じる学生よりも、こちらの思いが届かない、こちらの手を煩わせる、カッカさせる、落ち込ませる、そういう学生によって自分自身が多くのこと学んで成長してきたなという気がするんです。

教育というのは、英語で「エデュケーション」でしょう。

もともとの起りこりは、何かを引き出すというところからきていると聞いています。私は、その子のもつてているいいところを引き出す、可能性を引き出す、これが教育の一番大事なところじゃないかという気がします。子供たちも、本当に自分のいいところは、大学生でも答えられないのが多いです。よいところを見つけてあげる。一人一人を映してあげる。そうすると、その子がその子らしく、一人一人違った輝きをしていく。そうしたときに、苦手、弱点と思われることも克服していく。

私は学生たちに、「経験を積めば、足りないところを指摘するのは簡単だ。でも、本当の一流の指導者は、足りないところを指摘するんじゃないよ。その子のもつてているい

いところを見つけ出して、そこに光を当てて、そのことを

通して欠点を隠してしまう。それは難しいよ。おれもなかなかできないよ。ちょっと経験ができると、それを指摘していることで自分の優位性を感じてしまうことがあるけれども、現実は違う」という話はするんですね。

池田 私も、経営の方針では「加点主義の教育」というんですよ。

山下 私自身が、全日本の世界選手権の代表を決めるときでも、加点主義で行こうと。私も、それ以来、ずっと加点主義でやっています。

池田 それが一番いいと思うんですね。



これからの小学校教育

青木 教育の核心に触れる話に入つてまいりましたが、現在、教育改革が加速していますね。各小学校では、教育改革にふさわしい取組みということで努力しているところですが、今「夢と力をはぐくむこれからの教育」について全国連合小学校長会が目指しているお考えを、教育改革に絡めてお話しitだけれど思います。

池田 一昨年、教育基本法が改正されましたね。従来の基本法にあつた基本的な理念とか、それと同時に世の中の変化という面も踏まえ、変えていこうとしているわけです。これから社会はどういう社会かと云うと、「知識基盤社会だ」「知識が爆発する社会だ」と言われているし、「IT社会である」ということも言われている。そんな中で、知識というものについてのとらえ方がしつかりできる能力をもたなければいけない。根本には「生きる力」ということで、たくましさとか、物事を基本的によく考えるとか、健康な体をもつということになると思いますが、それと同時に、文化や伝統といったものがボーダーレス化していく社会だから、どうしたって必要になつてくるわけです。ボーダーレス化と同時に、技術革新と言つたらいいでしようか、そういう革新がされなければいけないということになつて

くると、創造的な考え方というのは当然必要なわけですね。

今、もう一つ世の中自体が忘れていることは、世界に通用するような教養。例えば、日本の中における文化をしっかりと踏まえた人間にならなければいけない。そういうことを踏まえたときに、では学校はどうしたらよいのかということになると思います。そういう三十年後の社会をしっかりと踏まえて、我々は教育をしていかなければいけない。

そうなってきたときに、それに応えていくことが、信頼をつくる、生み出すということになると思います。その信頼を生み出すためには、さつきも言いましたが、教育の本身ですね。きつちり教えなければならないところは教える。

子供たちが学んで自分で変化させていく部分については、それは大事にしてあげる。そのバランスのいい教育をしていかなければならぬし、そのためのカリキュラムを学校がしっかりともたなければいけないと思いますね。

今度は、そういうものを実現していくためには、先生を育てなきやいけないわけですよ。よい先生を育てなきやいけないし、ハートのある先生でなければいけないです。パッションとか、使命感がある、そういう先生をしっかりと育てていくことが私たちの一つの仕事であるわけですか、そこをしっかりと全国的にやっていけば、教育に対する

信頼はできてくるだろうと思いますし、そういうことをやっているよということを皆さんに周知することも大事だと思う。校長さんは、いつもいじめとか問題が起こつくると頭を下げていますけど、そういうじやなくて、よいことをたくさんやっているのだから、そこら辺をしっかりと分かってもらう。そういうことも大事だろうなと思っています。

青木 教育者というお立場から、小学校教育について。

山下 「学校は、教育は、何やつてるんだ」と、だれが言っているのか。もし政治家が言っているんだつたら、「政治家は何やつてるんだ、おまえの姿勢は何だ」と言いたくなりますよ。

うちの二十歳の長男が小学校一年生か二年生のときに、だれかが嘘ついたか何かで、「嘘は絶対つくくなよ。嘘つきは泥棒の始まりだからな」と言つたら、「お父さん、それは違うよ」「何が違うんだ」「嘘つきは政治家の始まりだよ」と言つたんです。(笑い)

子供たちを育てるのは、まず、しっかりと倫理観とか、道徳心とか、公共心とか。そして、学校もですけど、まずは家庭ですよ。そして地域ですよ。一番影響力があるのは、世の中の価値観ですよ。「教育は何やつてるんだ」と思うんだつたら、まず、日本のエリートが、日本を動かしてい

ると思つてゐる人たちが、自らの襟を正さなきや。

確かに、知識は大事です。だけど、人間性の伴わない知識は、悪いほうへ行きます。能力のある人が、豊富な知識を、自分のためだけに使おうとか、自分本位で自己的にやつていこうと思つたら、能力があればあつただけマイナスは大きいですよ。能力はわずかしかなくとも、少しでも社会のために役に立ちたい、人間性が豊かである、しつかりしている、嘘をつかない誠実さがあるならば、マイナス面はなきに等しいですよ。

ずっと昔、貧しいけれども日本人には誇りがあつた。生き方の素晴らしい日本人は、かつていっぱいいた。私の外國の友人は、映画の『ラスト・サムライ』が封切られたころ、「山下、観たか」「観たよ」「泣けたか」「泣けた」「おれも泣けた。あの映画は素晴らしい。何が素晴らしいか。日本を世界に知つてもらう最高のプロパガンダ（宣伝）だ」と言つたんですね。そういう言葉をいろいろ聞いている中で、私は、半分うれしかつたけど、半分寂しかつた。それは、あの中で描かれている日本人の生き方、トム・クルーズが伝えたかった生き方は、我々の中にはもうないんですね。私にとって出世は大事です、私にとってお金は大事です、地位も大事です、名譽も大事です、だけど、そういう

つたものでは測れない、目に見えないものも大事にしていく、あるいは数値に表せないものも大事にしていく、その視点が世の中全体に非常に欠けてきたんじやないか。

会長が言われた「三十九面もたなければいけない」というのは、単に知識、学力という評価だけじゃない。一人一人をきちんと反映していこうという言葉だと思います。一人一人を受け止めるというのは、一つだけの評価の仕方、価値観ではなくて、あらゆる人間のよい点を認めてあげる。

私は、そういう意味から言いますと、教育者がやるべきことは、子供たちや学生を磨くこと以前に、まず我々が自分を常に磨いていく。我々自身が、人間力、人間としての魅力を付けていくことが一番と思います。そして、「不易と流行」と言われましたが、もつともつと開かれた学校にしていくとか、外部のいろいろな力を導入していくとか、いろいろ連携していくとか、そういうことも大事だと思います。しかし、教員だけができる部分ではない。世の中全體が、「次の時代の子供たちを育てていく」ということに對して真剣に考えていかなければいけないし、今の世の中の価値観そのものも変わつていかないといけない。

そういう意味で言うと、これから的小学校教育に一番求められていくのは、まず、人間力を付けてほしい。よいこ

と悪いことの判断ができる、あるいは公共を大事にして自分も大事にする。もしかしたら人間の一一番土台の部分、人間性と言われる部分かもしません。こういったものは、二十歳過ぎてからなかなか変わらないんですね。学校だけでも変わらない。これは家庭の問題だ。

それからもう一つは、子供たちに活力、笑顔があるとうのは素晴らしいと思います。その土台の上に、これから時代に求められていく知性というものを。

中教審で言われている「生きる力」という言葉、まさにこれから時代に、子供たちだけじゃなく我々にも求めらていくのは、「生きる力」だと思います。自ら考え、自ら行動し、そして自立して生きていける、その基盤を学校時代に。それで何が大事かと言われたら、会長が言われた、三十九名いたら三十九通りの鏡をもつ。一人一人を受け止める。簡単じゃないけど、これができたらどれくらい子供たちが安心するか。子供たちがストレスがなくなるか。笑顔で輝いていけるか。そして、それを学校だけに任せることじやなくて、社会全体がそういうものをはぐくむ形になつていかなきやいけないという気がします。

池田 そういうふうにしていきたいですよね。

若手の人材育成とリーダーシップの在り方

青木 さて、少し視点を変えまして、山下先生はオリンピックの代表監督や世界選手権の監督をやられて、大変優れた選手たちを育ててこられましたし、現在、また、大学の教授という立場で人材育成にかかわっている。選手も含めて、人材育成についてどういうところに気を付けたらいのか、人材育成に対してもどのようにお考えかということを少しお聞かせいただければと思います。

山下 私の生き方の中で、学生に対する教育だけじゃなく、次の若きリーダー、次を背負う人たちをいかに育てていくかというのが、非常に大事なテーマです。私が何かの役職でどれだけの成果をあげるかということよりも、私が辞めた後もそれがどれくらい続していくか。やっているときには成果があがつても、自分が辞めたらそれがなくなつていくというのは、本当のものではないと思っています。急な成果をあげることよりも、歩みはのろくとも、仲間を引き連れて、みんなで。そうすると、三年、五年、十年経つたときに、ものすごい力になつていくと思います。志を共有する、それが一番大事ですね。次の時代の人たちに、自分の思いとか、自分の目指しているもの、この組織が目指しているもの、そういうふうにしていきたいですね。

うことについて意見交換をしていく。

私は、例えば十人集まつて何かを立ち上げようとすると、横を見て横と比較しないでくれということをまず一番に言います。十人が目指すものは、高ければ高いほどいい。遠ければ遠いほど、だれ一人反対がいなくなるんです。近ければ近いほど、いろんな意見が出る。そこでみんな合意できたら、これを目指してやつていこうと。

これをを目指していくときに、いろいろな考え方、いろいろな見方があつたほうがいい。集まつた人間が多種多様で、そして同じものをを目指したときに、本当に強いものができる。ということは、自分と意見が違う人というのは非常に価値がある。自分と意見が違うと対立しているように感じる部分がありますが、私は違う気がする。意見の違うところに価値がある。そうすると、その組織にいることに誇りをもつし、考え方が違うことに抵抗はなくなる。

そして、できると思った人にはどんどん任せます。人が育つには、権限と責任が移っていくないと、なかなかですね。

池田 そうですね。

山下 一年、二年、三年で成果をあげようとすると、トップダウンが一番簡単です。「行くぞー、ついてこい!」が。だけど、それで次の人が育っていくかというと、なか

なか。ですから、いろいろなところでも、私は意見をできるだけ最後に言うようにしているんです。私が最初に言うと、意見が出なくなるんですよ。

もう一つ、言うは易し。どんな立派なこと言つたってゼロ。行動に移つてはじめて少し価値がある。それによって何かの変化が起きて、成果があがる。よく、立派な意見がたくさん出るんですよ。でも、出た意見をやるのは我々です。意見が出て、そこで満足して「よかつた」、それでは何も変わらない。最悪です。それを具体的にどういう形でどうやって、だれが責任をもつか。あくまで行動して何ぼ。を目指した方向に動いているのか。それを大事にする。

青木 今、若手の教員が急増している学校現場ですが、校長はどのように若手教員を育てていくのか、また、これから的小学校の学校経営のポイント、こうしたものを会長からお話を伺いたいと思います。

池田 僕も、山下先生がおっしゃったように、やっぱり、若い人たちに誇りをもたせなければいけないし、自信ももたせなきやいけないし、経験も積ませなきやいけないし。そういうプロセスを通して、その人たちが育っていくのだと思います。よく言うんだけど、有能な人はたくさんいるわけだから、加点主義で進めていくつて、その人に役割をし

つかり意識させていくことが必要なわけですね。

そのときに、校長の仕事というのはいつたい何だろうかと考えるのですね。その学校、その学校によつて課題があると思います。課題を整理したときに、その先生たちにやつてもらえる仕事に変えることができるかどうかなんですね。結局、課題は課題としてお題目みたいに言うよりも、「解決のためにこんな手だてもあるけれども、このために、君、動いてくれないか」と言つたときに、その仕事の意味がでてくると思います。そういうような校長でありたいわけですよ。そのことがでていくことが、私たちにとつては、先生を一人一人育てていくことに結び付くわけで、それはひいては子供たちの幸せにつながることになつてゐるのかなと思つているんですね。

山下 若い教員の人に言いたいのは、まず、自分が不十分である、自分が未熟である、そのことを常に頭に置いてほしいと思います。教員になると、二十三、四でも「先生、先生」ですよ。教室の中では絶対的な力がある。親だつて、本当は「もうちょっと何とかしてほしい」「ああ、こんな若い先生だ」と思つたつて、良識のある人は、子供がお世話になつてゐるからと持ち上げるわけです。五十になつても、まだ穴ほこだらけです。でも、それでいいと思うんで

す。ただ、自分は未熟だ、不十分なんだ、子供たちと一緒に成長していかなければいけないんだ、という謙虚さがぜひ必要ではないかと思いますね。そして、情熱がそれを補つていく。先生だつて、校長をされていたつて、最初からそんな資質があつたわけじゃない。みんなそのプロセスを経ながら、一人前の教師に近づいてくる。私は、そういう意味でいうと、情熱、それから子供たちへの愛情。

もう一つ言うと、やつぱり向き不向きがあるんですね。三年ぐらい経たないと向いているかいなかからないと思うけど、なつて、これはおれには向かなかつたなど、そういうときは方向転換をしないと。教師は、損得で言うと、物質的な面では得はそんなにないです。ただ、自分の教え子たちが成長していく、その部分での喜びとか、その財産というのはすごいものがある。向かないと思つた人は、ぜひ方向転換を。「おれは教師に向いてないんだよ」と思つてゐる教師に習う子供ほどかわいそうなことはない。

校長先生には、そういうところを若い教師の方にぜひ理解していただくように。私は、若い人がそういう気持ちをもつてやつていただけたらと思いますね。

池田 そうですね。

先生というのは、昔から、五者にならなきやいけないと

言っているんですよ。学者、医者、易者、役者、行者。

山下 確かに、そういう要素をもつた先生だったら、素晴らしいでしょうね。

池田 山下先生がおっしゃるような、日々自分で足らないところをやっていく。その中で、「守・破・離」ですよね。これはやっぱり大事だと思います。

山下 そういう意味でいうと、校長先生には、若い教員を育成していく上で、遠慮しないでほしいですね。今、組織に入つたら、どんなに優秀と思われても、最初は雑巾がけから。そこには序列がピシッとする。ところが教員は、社会の組織と違つてみんな一人一人。管理職、あるいは管理職でなくとも、経験豊富な先生方がみんなで、若い人たちを叱咤したり、励ましたり、支えながら。もし校長先生にお願いするとすると、そういうところです。

今、世の中は、あまりにも短期の中で成果を求めすぎる。教育というのは、後から効いてくるものなんですね。教員、校長としてどう評価されるかということよりも、少しでもいい教育が施されるようになると、その校長先生がやっている間には成果があがらなくても、これから団塊の世代の教員が辞めていきますから、若い人たちにどういつた教育、どういった指導をしていくか、世の中の常識も何

も分からぬ人たちをいかに一人前の教師に育てていくか、もしかしたらそこに教育がかかつてゐるかもしれないですね。そこには、忙しい校長先生でも惜しみなく時間を注いでほしいな。それが大事かなという気がします。

小学校長への期待

青木 最後に、日々学校経営に努力しております私ども二万二千余の小学校長に対しまして、先生より叱咤激励のお言葉をいただければと思います。

山下 昔に比べると、校長先生の役割ははるかに大変になつてきましたね。求められるものは変わってきた。学校運営だけでなく、経営という視点も出てきたり、世の中が求めるものも多種多様になつてきた。見方も、社会はさて置いて、教育ばかりにそれを求めてくる部分もある。

私は思うんですけど、人を変えることは難しい。でも、自分を変えることは幾つになつてもできるはずだ。私は、つい十五、六年前までは、強い者だけが生き残ると思っていました。でも、自然界は、もう四、五十年前から、そんな説は通用しない。適者だけが生き残つてくる。どんなに強がつても、自然という環境に勝てる生き物はない。環境が変化していく中で、その環境に対応していく人間だけ